

本草学者平賀源内が創成したものは何か

川崎, 瑛子

(出版者 / Publisher)

法政大学大学院 国際日本学インスティテュート専攻委員会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

国際日本学論叢 / 国際日本学論叢

(巻 / Volume)

7

(開始ページ / Start Page)

19

(終了ページ / End Page)

48

(発行年 / Year)

2010-03-18

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00005960>

平成二十一年度 国際日本学論叢第七号 二〇一〇年三月十八日発行 抜刷

本草学者平賀源内が創成したものは何か

社会学専攻修士課程二年

川崎 瑛子

本草学者平賀源内が創成したものは何か

本草学者平賀源内が創成したものは何か

社会学専攻修士課程二年

川崎 瑛子

はじめに

一七二八（享保一八）年から、後期へと至る時期である一七七九（安永八）年まで生きた平賀源内は、とても風変わりな男である。四国の讃岐で生まれたこの男は大坂と江戸で本草学を修め、江戸で博覧会の先駆けとなる薬品会を開いた。それが終れば、今度は火浣布という不燃性の布を石綿から作りあげ、鉾山の開発にも意欲的に取り組んでいく。そうかと思えば今度は羊毛から毛織物を織ろうとする突拍子も無いことを考え付き、次の瞬間にはタルモメイトルやエレキテルといった海外の品物の復元に夢中になった。その間に油絵も描けば戯作や浄瑠璃といった娯楽作品の執筆も行い、江戸で人気を博した。

彼の職業を語る言葉は「本草学者」「発明家」「作家」「絵師」「コピーライター」と多種多様である。行動範囲も興味も多岐に渡る彼は一体何をしたかったのだろうか。ただ気のむくまま風のむくままに生きていった奇人変人なのだろうか。その結果何一つ大成せず、自分の有り余る才能を認めようとしない世間に対して不満と愚痴を募らせる一大不平家となった挙句に人を殺し罪人となって病死した「非業の人」なのだろうか。

ここで一つ注目すべき論文が存在する。それは源内の書いた談議本の本質を分析した東喜望氏の論である。一部を引用する。

……（中略）……一つの話題を継起として、むしろそれとは不即の話題が次から次へと拡散的に展開し、最後に意表を衝いて、巧みに全体を収束するという書きぶりである。⁽¹⁾

「不即」の話題が「拡散的に展開」するとはまさに源内の人生そのものではないだろうか。源内は自分の人生はおろか、書いた物語の道程ともいえる構成すら拡散的展開であったのである。源内の物語は源内らしさが滲み出ているといえるだろう。

だがここで注目すべき点は、源内は自分の書く物語で幾つもの不即の話題を拡散的に展開させたとしても、最後には「意表を衝いて、巧みに全体を収束」させているということだ。

即ち次に何をするか予想がつかず、数多の分野を駆け抜けた源内の活動は、全てたった一つの「理由」に収束されるものである可能性が高いということである。

本草学者平賀源内が創成したものは何か

では彼は何を目指していたのだろうか。何を思い、何を目標に掲げて人生を駆け抜けていったのだろうか。全ての活動の結果と意味が収束し終息する終着点とは一体何処にあったのだろうか。

そして「平賀源内」とは何者であったのだろうか。

様々な肩書きを持っていた平賀源内であるが、彼自身は自分を何であると思っていたのだろうか。それは全国の動植物を研究する本草学者である。

彼は故郷の讃岐で儒学と本草学を学び、江戸に出てきてからも田村藍水という本草学者に弟子入りをしている。よって彼が幼い頃から学び続けている本草学こそ、彼の人格と人生を形成し構築する最たるものであったと思われる。そこで、本論文では「本草学者である平賀源内」を第一の前提とする。そして彼の本質に切り込むことで、彼の多面的な人間性と行動が収束されるたつた一つの「理由」の解明を行い、そして中期から後期へと至る日本国にどのような影響を与えたかを考察していくこととする。

一 カミサマになりたかったヒト

まず一七六三（宝暦一三）年一月に刊行された彼の著作である『風流志道軒伝』に注目する。これは本草学とは全く関係の無い談議本である。何故この物語を取り上げるのかというと、この物語では主役である深井浅之進が江戸を出発し日本全国を行脚した末に海外に飛び出すという非常にグローバルな展開を見せる物語だからである。

そして源内の文体では地名や国名など、特定条件にそった単語らが修飾語に飾られることなく勢いよく列挙されて

いく「尽くし」の手法がよく取られている。『風流志道軒伝』でもこの息も吐く間もなく「もの」の名前が押し寄せてくる手法、言い換えれば右足が落ちる前に左足を出して空を飛ばうとするようなスピード感のある執筆方法によって日本から外国へと浅之進は飛び出してしまった。この空さへ飛んでしまうスピード感と後から後へと押し寄せてくるコトバによって展開される物語は、肉体的な躍動感を感じさせるものであり、江戸や讃岐のみならず長崎や紀州、秋田にまで足を伸ばした源内の行動の具現化ともいえる。よってこの物語は最も彼自身の思想が強く反映されており、また彼の願望も共に込められている可能性が高い。

物語の主役である浅之進の出生は、金色の松茸が臍に入ってくる夢を母親が見たことに端を発する。これが仏陀をモチーフにしていることは明らかだ。仏教の祖の誕生エピソードを、源内は男根の象徴である松茸で笑い飛ばしている。そして母親の懐胎場所は浅草観音の御許であり、ここでも神が顔を赤らめる事なく母親に男根を賜っている。

こうして神を俗化させる一方で、源内は人間である己を神へと昇華させているのだ。浅之進の前に現れる風来山人の風体は、百草を嘗めて効能を確かめ、人々に医療と農耕の術を教えた医薬と農業を司る神である神農と酷似している。そしてその神農に酷似した風来山人は平賀源内自身であると、作者である源内は非常に分かりやすく描写しているのだ。

つまり平賀源内は神農に自らを投影している。人間である己を神である神農になぞらえている。神を俗世間に引き摺り下ろした上で人間である己を伸し上がらせたのは、源内の傲慢さが現れただけではないと思われる。仏陀の誕生エピソードを浅草観音という身近な神格に置き換えていることから、恐らく彼にとって神はカミという種族であって、非常に人間と近い位置にあったのではないかと思われる。源内にとって神はこの世界上に存在する種の一つであっ

本草学者平賀源内が創成したものは何か

た。だが人間と近い場所にいるといっても、神通力を持ち、人に命令を与えるところから、人よりは高位の存在である。

ここから私は神をカミと片仮名表記にする。それは人間の生物和名が「ヒト」であるのと同じ理由からである。源内は決して^①のふのような支配者としての神になりたかったわけではないからだ。

神農は中国の皇帝の一人である。ヒトであつた生命がカミへと昇華されているのだ。その過去の事実には源内は憧れたと考えられる。この「ヒトがカミになる」という発想や憧憬は風来山人のキャラクター設定にしっかりと注ぎ込まれているのだ。風来山人が元々ヒトであることは浅之進に自身の身の上を語った台詞で明らかになっている。

我は其昔元暦年中の生れにして、源平の戦などは稚心の耳に残、……（中略）……我もそれより世を通、山林に隠、木の実を食して餓をしのぎけるが、いつとなく仙術を得て、飛行自在の身となり、風に任せるからだなれば、自風来仙人と号して五百余年の星霜を経たり。^②

こうして人として生まれ、山林に隠れて木の実を食べて飢えを凌いでいるうちに、いつしか風来山人は仙術を身につけたことがわかる。そしてこの記述から風来山人のカミとしての能力は「風に乗ること」だと明らかになる。よって風来山人に自らを投影していた源内は人でありながらカミとなり空を飛ぶ力を欲していることが分かる。

では何故、平賀源内は自身を神格に見立てたのだろうか。しかもその見立てられた相手は神農という本草を司るカミである。東都薬品会という本草を含んだ全国の物産の博覧会を開催し、既に本草学者として広く名を馳せていた彼

が本草のカミに自らをなぞらえた理由を探るためには、中国を起源とし、日本に渡ってきた本草学の歴史と、本草学者として活躍した平賀源内の姿を探っていかねばならない。

二 本草学の歩み

本草学について書かれた最古の書は、後漢の時代に成立した『神農本草経』である。『神農本草経』では物産を玉石、草木、虫獸、果、菜、米食の何れかの項目にまず分類している。これは人間を基準としない自然分類である。その自然分類を経た後に、各々の毒性に応じて物産を上薬、中薬、下薬の三類に分類している。これを三品分類と呼ぶ。その後の中国では、『神農本草経』の誤りを正そうとする意識の下で李時珍による『本草綱目』が一五九三年頃になる。上薬、中薬、下薬の定義は変化を遂げ、物産の毒性ではなく品質を分類する指標となった。ここで注目するべきは、本草学は伝統を頑なに守ろうとはしない学問であるということだ。分類の定義すら変更してしまう柔軟な思考形態が許されて享受される学問なのである。また自然分類による分類項目も『神農本草経』以来固定されて受け継がれていたのではなく、細分化且つ複雑化されて発展してきていた。本草学は伝統に固執しない。そして固定された分類方法や定義の枠の中で成長を遂げる学問でもない。即ち常に均質性と同調が望まれている学問分野ではないのだ。そして『本草綱目』では物産は、水、火、土、金石、草、穀、菜、果、木、服器、虫、鱗、介、禽、獸、人の十六種類に分類されている。この細分化され尽した項目の中には「人」の項目が含まれている。これは『神農本草経』には無かった視点である。『本草綱目』では本草学的世界観に基づいて、「人間」を他の事物と同等に扱うだけではなく、

本草学者平賀源内が創成したものは何か

その存在を客観的に見つめ、そして冷徹に「もの」として取り扱うことを決めた。つまり『本草綱目』は、人とその他の自然物、生命体を明確に区別した分類方法を取りながら、人間も本草学書に取り込むべき事物の一つであるという認識を明確にしている。

そして人間の手によって作り出された技術品である服器の項目まで取り込んでいることから、本草学は自然物と技術品の両方を区別すること無く、この世を構築する要素と認識し始めたことが分かる。

この世を動植物などの生命体や物質と共に人間を包含した巨大空間であると認識している本草学は、常に世界に存在する物質の刺激を受けていく学問である為、ある時には基本的土台すら破壊することを余儀なくされる。人と物との関わり方は常に一定したものではなく、多様性に満ちているのだ。今回の『本草綱目』では三品分類法の定義を変更することが破壊行為であり、そして新たな本草学の再構築手段であった。『神農本草経』を確固たる基盤とし、旧きを踏襲し保存した上での穏やかな成長発展ではなく、破壊と再構築を組み込む暴力的創造性を本草学は認めている。この暴力性と柔軟性を孕み合わせ、世界の変化と刺激に合わせて常に再構築が求められている本草学の創造性が『本草綱目』によって可視化された。

『本草綱目』は『神農本草経』への批判精神によって成り立ち、世界的な本草学書となった。江戸時代の日本でも『本草綱目』は重宝されていたが、一七〇九（宝永六）年に儒学者であり本草学者でもある貝原益軒が出版した『大和本草』によって日本は独自の本草学の道を歩みだすのである。

貝原益軒は『大和本草』の中で『本草綱目』を真つ向から批判した。これは『本草綱目』に従属していた江戸本草学にとって画期的な出来事であった。

貝原益軒は『本草綱目』を盲信してはならないという姿勢により、自ら各地を廻り、実際の動植物を自身の五感で確かめることによって具体的な知識を得ていったのである。『神農本草経』という核を批判した『本草綱目』は世界に名だたる本草学書となり、新たな本草学の核となったにも関わらず、その『本草綱目』は再び進歩の為に批判される。批判的学問としての本草学の歴史と姿勢は源内が生まれる以前の日本にも伝わり、芽を出していたのである。そして貝原益軒は『本草綱目』を盲信し、海外の人間を徒に博学だと信じている日本人や外国崇拜の風潮にも批判の目を向けている。また益軒はこうも書いている。

……（中略）……此学を為る人は博学該洽多見闕疑始……（以下略）^③

つまり本草学を学ぶには多くのことを聞き、多くのものを見た上で「疑う」ことを始めなければならないと益軒は言っているのだ。疑問から始まる批判的見解を益軒が重要視していることが分かる。そしてこの見解に基づいて、益軒は独自の「もの」の分類体系を提出した。『本草綱目』は『神農本草経』を批判し、新しい分類法を構築することで誕生した。よって本草学の発展に必要不可欠である批判的探究心が日本に芽生えたということは、日本独自の本草学が誕生する可能性が生まれたのである。

だが『大和本草』は『本草綱目』を真っ向から批判しているものの、その知識を全て破棄したわけではない。本草学は伝統の破壊と批判精神によって成長していくが、全面的な否定と排除は行わない学問でもあるのだ。

これまでの日本での本草学といえは、治療効果が期待できる薬物としての利用価値を多く有した動植物が研究対

本草学者平賀源内が創成したものは何か

象とされる傾向があったが、『大和本草』に記載されているものの中にはそうした利用価値は少ないであろう雑草類も多く含まれている。それどころか「飧飯（水に浸された飯）」や「味噌」といった人間の手による加工食品まで含まれており、医療に縛られない新たな本草学の姿が見られる。人間に対する薬理的作用に拘る人間主体の学問ではなく、自然の内側にある対象物があるがままに見つめる対象物主体の博物学的視野が『大和本草』には含まれているのである。本草学は複数の分野を寄り合わせて作り上げられる学問である。よって本草学の研究方法や、本草学書の収載品の記述法などに均一性は求められていない。基盤となる分類方法さえ、李時珍や貝原益軒によって変えられてしまった。そして本草学の発展には学問分野さえ超えた多角的な切り口と視点を駆使した批判的探究心が求められている。即ち本草学とは二種以上の分野を掛け合わせるという通分野性が享受され、肉体と好奇心を総動員させることが求められる学問であるといえよう。

では日本の本草学は『大和本草』以降、如何なる進化を遂げたのだろうか。

三 江戸本草学の道程

『本草綱目』や海外盲信思考に真っ向から異議を唱えた貝原益軒は新たな分類体系を提出した。その分類法には新しく薬類、民用類、園草、薬木類、園木、小鳥、家禽、異邦禽が加わっている。薬や民用などの視点は人を絶対的な基準としており、自然分類とは馴染まない。これは極めて実情を反映した分類法と言えるだろう。純粹な自然界のみに眼を向けない益軒の姿勢は非常にロマンを欠いたシビアなものである。この「実情」を見つめる現実的な視点の開

発こそが日本の本草学を作り上げていく。

実情を踏まえることを重視する本草学は、直接的有用性が求められる薬学的思考から離れていく。まず実情を把握する為には現実と実物を見なくてはならない。その為、現地に足を実際に向けることが行われるようになった。こうして常に移動しながら自らの五感を使うという活動的な学問へと本草学は発展していく。薬理作用や用法などの医療効果のみに限定される関心は薄れ、物質の名称や形状に加えて栽培方法などの「もの」の物産化を目指す研究に重点が置かれていった。益軒の五感を活用した方法論は本草学を身体的な活動性のある学問へと変え、それは「もの」の増産化など商業に結びつく可能性を孕み始める。この可能性は、『大和本草』から時を経た八代将軍吉宗による殖産事業推進運動によって具体化される。本草学は産業にも影響を及ぼし、また商品流通を思想ではなく物質によって現実に解決する手段の中心的な担い手となっていた。

このような産業システムの鹵車となった実用商品学的本草学こそが日本独自の本草学の先駆けである。

だがこの実用性に重心がおかれた本草学は政治的利用によって発達した形である。これは本草学のモデルの一つにしか過ぎない。本草学は暴力的創造性を享受する学問である為、常に幾つもの可能性を孕んでいると思われる。よって政治が介入することなく、純粹な学問として歩んだもう一つの江戸本草学の姿がある筈だ。それを次節で考察していく。

四 宇宙の理を求める学問

『大和本草』の出現は日本の本草学界に大きな影響を与えた。それは『本草綱目』に批判的精神を持って立ち向か

本草学者平賀源内が創成したものは何か

った他にも薬学的視点から逃れた本草学を提示したからである。ではどのような思考経路が『大和本草』を立ち上げ、そして後世に受け継がれたのだろうか。

『大和本草』巻之一の「物理を論ず」では天地開闢の頃には未だ人類は誕生していなかったという壮大な視点から始まっている。ではどのように生命が誕生したかという点、人間も含んだ万物はすべて、天地に充滿していた「気」から発生したとされている。天地という広大な世界の中に他存在と同じ方法によって人間が生を受けていることから、益軒は人間を絶対的な権力者や支配者としてではなく他の動植鉱物と同様に世界の内部を構成するピースの一つとして捉えていることが分かる。この益軒の壮大な発想の源とは何であろうか。それは『大和本草』の自序に見られる。

古人謂有「宇宙内事皆吾力儒分内ノ事ト蓋經以道ヲ載セ史以事ヲ記ス其ノ次物ヲ集ル之書亦可不」⁽⁴⁾

「古人が言う事には、宇宙の理を知るためには「道」の事を記した経書、「事」を記した史記、そして「物」を集めた本草が無いといけない」という意味である。

ここで「宇宙」という言葉が出てきた。この宇宙の言葉の前には「天地の道」という言葉がある。人類が誕生する以前から存在し、現在に至るまで全ての無機物有機物を分け隔て無く包み込んでいる無限の世界空間のことを宇宙と呼んでいるのである。この「宇宙の理」に相当する言葉として「造化の妙」、「天地の間の理」という言葉が自序と巻之一には複数回登場する。また序論でいきなり天地開闢の話題を出すなど、貝原益軒の視点は非常に壮大であり、その興味は天地に存在する万物全ての姿と、その「理」に向けられていることが分かる。

では「理」とはなんであろうか。それを探るために、「物理を論ず」の内容を探っていく。ここで益軒の言う「物理」というのは現代の物理学のことではなく、「物の理」を意味するものである。益軒は物の理を論じるのである。

その「物の理」の一つとして、益軒は自然界に存在する草木に共通する一つの法則に注目している。それを現代語訳したものを以下に示す。

蔓草は全て左旋である。これは天の定めた左旋の法則に順っているのである。左から昇って、右に落ちることを左旋という。天道は左旋するのである。日や月、星も全て同じく左旋する。人は北を後ろにし、南に向かえば、左は東で右は西である。天を行く日や月の道程は、全て東から昇り、西へ落ちる。これは左旋の法則に従っているからである。茶臼が回転する方向も蔓が物に絡みつく方向も全て左旋である。右より昇り左に落ちるは右旋であり、逆行である。茶臼が回る方向も、蔓が纏いつくのも、全て右旋であるという言う人がいるが、それは間違いである。よく考える。人の力を以ってする現象だけではなく、天の氣と茶臼と蔓草の回転をふまえてよく考えてみる。^⑤

以上の事から、益軒は自然界に存在する左旋の法則に気がついていることが分かる。このように、自分を取り巻く世界の中に存在する法則性としての「物の理」の解明に本草学者である益軒は全力を尽くし、またそれを「よく考えてみる」と推奨しているのである。

この益軒の目は最早、本草を薬物のカテゴリーの範疇のみでは見ていない。人体に対して「効く」か「効かない」かを益軒は重要視していない。そうした医療性を飛び越えた先にある、現在の自然界に潜む動植物そのものの本質の

本草学者平賀源内が創成したものは何か

解明に益軒の興味と熱意は向けられている。

またこの左旋の法則を益軒は蔓のような植物のみに限定して語るのではなく、茶臼のような人の手によって作られた器械、且つ星や月といった天道にも当てはめているのである。これは種の差異を超え、宇宙空間まで含めた天地の万物の相同性と、その内部を一貫する存在の法則性に視線を向け、そしてそれを見つけたと言えるだろう。星や月と茶臼など全く相容れないものたちを同時に扱うことを益軒は全く恐れておらず、またその中に同じ法則性が存在していることを疑っていないのである。種を超えて万物は互いに相同かつ相似関係にあると益軒は考えているのではないだろうか。こうして直接的な有用性の解析から離れて、物と物の間にある複雑な関係性に眼を向ける博物学的方法論が江戸本草学の中に確立していった。

自然の中にある物質の多様性と、その多様性を貫いている同一の法則性こそが益軒が追い求め、語った「物の理」であり、そして「宇宙の真理」であった。

日本に輸入された本草学は「人間も含めた無限の世界空間の中に一貫して潜み、世界を世界たらしめる原理を知ろうとする学術的探究心」を持つ学問となったのである。

本草学は批判的探求心に乗っ取って発展を遂げ、伝統の破壊者を望んでいる学問分野である。世界の変化と刺激に合わせて常に再構築が求められている学問が本草学なのだ。よって『大和本草』が江戸の新しい本草学の先駆けとなったのは間違い無いが、さらにその『大和本草』を批判的に探求し、新たな本草学を目指す意思や衝動が「本草学」には必要となってくる。『大和本草』以降の平賀源内の時代に生まれた新しい本草学は、幕府が目指した殖産に関わってくる実用的本草学や、「もの」を蒐集し、世界の原理を追究することを「楽しむ」遊戯的本草学である。だがそ

これは『大和本草』からなだらかな成長を遂げた末の本草学の姿であり、『大和本草』が嘗て『本草綱目』を真つ向から批判し、斬新的な分類法や手法を独自に編み出したような暴力的創造性から生まれたものではない。『大和本草』以降の江戸の本草学には、本草学の成長に不可欠な批判的探求心や、その批判精神から更なる本草学を誕生させるほどの衝動性が希薄になっていた。そして『大和本草』が目指していた「宇宙の理」を知るといふ思想的本質を見失いかけていたのではないだろうか。また『大和本草』は日本にとっては画期的な本草学書であったが、その記載内容は日本国内部の物産に留まるものであり、『本草綱目』のように世界的学問書となりうる物ではなかった。

平賀源内にとって本草学とは完成された学問ではなかったのではないかと思われる。源内にとって本草学は未分化の状態であった。この複数の分野の特徴が入り混じった混沌的な学問を更に分化させ、そして誕生に至らせる衝動を源内は欲していたのではないだろうか。

源内は『大和本草』は勿論、当時の世界的本草学書であった『本草綱目』さえ乗り越えた、新たな本草学を作り上げようとしていたのではないかと考えられる。それはただの本草学ではなく、世界に名を轟かせる本草学である。嘗て本草学の祖であった『神農本草経』を批判的に見つめることで生まれ、本草学書第一の座を奪った新生本草学『本草綱目』のように、『本草綱目』を過去のものとする本草学書を源内は作りあげたかと思われる。まさに本草学の創成を彼は担いたかったのだらう。それは一七六八（明和五）年に、武州川越藩の儒臣に当てて書かれた書簡で知ることができる。城福勇氏の読みに送りがな等を補って引用する。

然れ共何ぞ二テ取付け右の著述成就さへ仕り候得バ、唐、紅毛へも渡り、肝ヲ潰させ申すべく候存念ニ御座候。⁶⁾

本草学者平賀源内が創成したものは何か

「唐、紅毛へも渡り、肝ヲ潰させ申すべく」から源内は自分の創り上げた本草学が世界に旋風を巻き起こすことを望んでいることが分かる。つまり新たな本草学の祖に源内はなりたかったのではないだろうか。そのような思惑や夢があったからこそ、『風流志道軒伝』で本草の化身である神農に自らを投影したのだと考えられる。

「ただのヒトがカミになった」という事実に憧れ、本草学の祖を目指した源内は、神農のような本草学のカミサマになりたかったヒトなのかもしれない。

では彼が創成したかったのは本草学という学問だけなのだろうか。

五 平賀源内の見る夢

本草学者である平賀源内が成し遂げた本草学事業として第五回東都薬品会を主催したことが上げられる。では源内はどのような気持ちでこの薬品会を主催したのだろうか。それは開催の半年前に全国に配られた引札である『東都薬品会趣意書』の中で明らかにする。それを現代語に要約したものを記しながら、源内の薬品会に込めた想いをまず解明する。

元禄中、稲生先生が始めて本草学を唱えた。その後、貝原先生や松岡先生が京都に出てこの学問を海内（日本国内）で行われた。そして著された書物はとても役立つものである。これによって舶来品を減じ、国産のものを

薬用として使うこととなった。だが我が師である田村藍水先生が言う事には、珍器や異品は神区奥域とされる日本の深山幽谷を窮めなければ得ることができない。本草学が世で盛んに行われているといっても、深く勉強しようとする者がいない為、まだまだ日本には知られていない産物があるのだ。これらを知ることができれば、舶来品を待つ必要もなくなる。^⑦

ここからは本草学によって自国の物質の有益性を高め、舶来品に頼ることの無い生産力と自給力を持つとする享保期以降の実用商品学的本草学の思想が見られる。

既に四回に渡り薬品会を開催してきたが、これまで知られずにおり、明らかに出来た物品は僅か十種類程度である。まだまだ宿願は果たしきれていないといえよう。その為、来年の夏に開催する会には、是非とも同好の士である諸君らの在所の産物及び所蔵するものを無名のものであってもかまわないため、送ってくれることを望む。^⑧

日本国にあるが未だ知られていない珍品奇物の類を知りたいとする源内の意欲が感じられる。では外国に頼ることの無い暮らしを目指した国産力の増強だけを目的として源内は物品を集めようとしたのだろうか。彼は、中国や阿蘭陀の本草学書に出てくるものの多くは、日本の各地に眠っている物産で事足りると述べ、どんな無名の異物であっても思うままに出して欲しいと何度も遠国の士たちに出品を募る。ここからは異国独自とされる物産を日本国内にて同定したいという新たな物産の発見に対する彼の熱意が読み取れる。

本草学者平賀源内が創成したものは何か

では異国の舶来品を待つことなく、日本国の物産のみで国力の増強を図る方法を追求するのであれば、異国の物産を知る方法はドドネウス (Rembertus Dodonaeu) の『本草書』(原題: *Crypt-Boec*) などの書物のみに留め、薬品の出展品は国内の種のみに限定しなければならないと思われる。しかしこの薬品会に出品された物産を解説した『物類品隲』には日本国の物品だけではなく、中国や西洋のものも区別無く収載されている。即ち薬品会とは、日本国の生産力や利潤を向上させる為の手段を考察し追求することを第一の目的とする会合ではない。海を隔てた異国と日本の深山幽谷を窮めた先にある未知なる「もの」への憧憬と、知られざる知識を常に貪欲に追い求める学者達の交流によって、「もの」が持つ本質の解明を図る場であったのだ。

そして源内は引札に「これまで日本国内で知られずにおり、今までに明らかに出来た物品は僅か十種類程度である。まだまだ宿願は果たしきれていない」としているのである。源内は未だヒトに知られることなく山海に埋もれて眠っている「もの」の姿と、その「もの」が持つ噂話や伝説ではない本質を、真実の知識として得たいのだ。

源内は未知なるものの「発見」と「解明」を楽しもうとしているのである。日本国内部の秘境だけではなく、海に向こうの国の中に存在するであろう誰も知らない「もの」達の姿と知識を源内は明らかにしようとしていた。

本当に存在するのかどうかも分からず、確認すらとれていない、何で出来ているのかすらわからない深山幽谷の「もの」たちは暗黒性に満ちた仮説的な物質である。

そしてその仮説性を打ち払うことを源内は誰よりも望んでいた。この情熱と未開のものに対する好奇心の強さは、それまでの本草学者達の追隨を許さないほどであった。自身が主催となった第五回薬品会こと「東都薬品会」では前もって全国に引札を配布し、会に出席できないであろう遠国在住の研究者の為に「諸国産物取次所」まで用意するな

ど、「東都薬品会」により多くの物産を集めるための宣伝と工夫に源内は心血を注いでいる。その甲斐あってそれまでの薬品会での出品数が二百前後であったのに対して、東都薬品会では千三百余りの品が集まった。源内の本草学にかける情熱は、本草学に興味のある限られた人種だけだといっても全国の民衆を連結させ、それまでの薬品会には出品しなかった人間たちの気持ちさえ揺り動かし、行動させるほど強いものであったのだ。

そして源内の熱意は、「出品する物産は無名のものでかまわない」と言い切るほど、質に拘る事無く兎に角多くの「もの」を江戸に集中させることに注がれた。もし薬品会が日本国の益の向上のみを考える集会であるならば、量と共に質を重視する筈である。大勢の人間の興味を引き、大多数の人間と「もの」を一堂に会させようという源内の意欲が向かう先は未知なるものへの探究心であり、未知を既知とする発見と解明への希望であった。

全五回の薬品会の開催で二千種を超える「もの」を蒐集し、同好の士との交流を図ることで未知なるものの発見と解明を行おうとする源内が望んでいたことは、仮説的物質の暗黒性を打ち払い、「宇宙の理」の核心に近づくことで、仮説が存在しない「世界」の「世界」たる本来の姿を白日の下に明らかにすることではないだろうか。

そのような源内の、産物から「世界」を探ろうとする情熱は薬品会から十五年後の『放屁論後編』の追記に書かれた一文から伺い知ることができる。

又造化の理を知らんが為産物に心を尽くせば、人我を本草者と号け……（以下略）……^④

ここに出てくる造化とは天地とその間に存在する万物、すなわち森羅万象であり「宇宙」をさしている。薬品会か

本草学者平賀源内が創成したものは何か

ら十五年経った時期であっても、源内は天地に溢れる全ての物体、生命、事象の中に潜む原理によって成り立つ無限の空間としての世界を飛び回り、それらを形作る原理と真理の本體を知ることに関心をかけていた。これはまさに「宇宙の理」を探ろうとする本草学の真髓であり、本草学者の宿命ともいえるだろう。

源内はその「宇宙の理」を知る第一歩として未開の地から未知なる物産を集める薬品会を開いたと考えられる。それまでの薬品会とは比べ物にならないほど多数の物産が集う空間を見て、源内はまるでこの世の全てが集まったような気持ちになったことだろう。

源内は物産の現実的な利用価値を目指す本草学を追求しながら、それ以上に人間との交流によって得られる「もの」の新発見に励み、且つ「世界」を「世界」たらしめる法則の解明と、未知の要素が一欠けらもない本来の「世界」が目の前に現れることを望んだ。一五年後の著作からも分かるとおり、それは源内の生涯の目標であった。

そして未知の要素が一欠けらもないあるがままの「世界」の姿を明らかにするということは、視認されている「世界」の姿を変革することでもあり、それは新たな常識を持った「世界」が誕生するという事である。源内は自らの手によって「世界の変革の末の誕生」を起こすことを求めていたのではないだろうか。

そのことを源内自身は『放屁論後編』で自分をモデルにとった貧家銭内に語らせている。

物語では源内こと銭内の元にエレキテルの構造について聞きにきた儒者にむかって銭内はこう言う。

さらば火の出づる根元をお目にかけん¹⁰⁾

そう言つて彼が取り出したのは「昔語花咲男放屁論」という小冊子である。

では「昔語花咲男放屁論」とはどのような内容なのか。それは『放屁論後編』のタイトルにもなり、江戸で放屁芸を見せていた放屁男の過去にまつわる物語である。

四年前に江戸で名を馳せた放屁男は、今年は三国福平の名で采女原に現れた。放屁男の父親は佐次兵衛という名の獺師であつたが、近所の人間と四国巡礼に出かけた折に猪や猿を殺した報いを受けて生きながら猿となつてしまつたらしい。共に出かけた近所の人間は、猿になつてしまつたのならどうしようもないと見捨てて帰ってくる。放屁男は悲しんだ末に一つの結論を出した。

……（中略）……せめては父が現世未来畜生道の苦患を免る為にとて、一切経を供養せんと思ひ立ち、鳥が鳴東路を銭がなくなつたどり着、本銭の入らぬ金もうけを工夫して、いつとなく屁を比類なき、親孝行の奇特にや、両国橋の屁撒と江戸中の大評判¹⁾。

放屁男が江戸で大評判を得る芸を身に付けたのにはこのようなエピソードがあつたのである。孝行息子の放屁男は有名になつた。放屁芸の創始者となつた。「銭がなくなつ」という状況であつたが、それも解消されたことだろう。めでたしめでたしである。だが物語は終らない。親孝行な放屁男に心を打たれた人々が現れたのだ。それは猿になつた佐次兵衛を見捨てた近所の人間である。彼らは自分たちも佐次兵衛の供養をすることにした。

本草学者平賀源内が創成したものは何か

……佐二兵衛^{ママ}が追善供養、共に力を合せん為、空也上人の鉢扣、茶筌賣より思ひ付、哥念佛を趣向して……
 (中略) ……若い陀佛若陀と賣歩行、大評判に預りしも、皆福平が孝行のなす所、古今にまれなる屁柄者¹²⁾。

一人の工夫が他の人間の意識を刺激し、新たな芸を誕生させる。そしてそれは江戸という世界を湧かすのである。放屁男に刺激を受けた近所の人間は放屁芸を真似するのではなく、空也上人の鉢扣、茶筌賣といった別の芸能から哥念佛を趣向している。放屁芸という一つの芸が創成されたことで、放屁芸以外の芸能分野でも変革と創成が行われていく。そしてそれは創成が担われた一分野のみの喜びで終るのではなく、世界全体の意識まで変革してしまうのである。銭内が語ったのはただの放屁男の孝行話ではない。これは一つの工夫によって生まれた発明の結果が他分野の活性化まで引き起こすという刺激の伝導の物語である。そして「もの」の本質を追求する好奇心と意欲、且つ「もの」が持つ有益性の更なる向上を模索する思考も伝導することによって技術開発が促進されていき、その末に起こる人間と都市の「変革」と「誕生」を源内は語っているのである。

つまり源内は、自分の「工夫」の才覚が引き金となり、世界が新生される未来を夢見しているのである。その源内の夢が、放屁男の形をとり、江戸という読み手にとって親しみやすい場所を舞台にして語られていたのである。更に銭内こと源内は「さらば火の出づる根元をお目にかけん」と言い、この放屁男による世界の変革エピソードを語ったのだ。そして後のエレテキルについて語る部分で、彼はこうも言っているのである。

天地の間に火程尊き物なく、その火の道理を目前に喩す故、ゑれきてるほど尊き器なし¹³⁾。

天地の間に火以上に尊い物はないと源内は言う。その火の更に「根元」を語っていたのである。即ち『放屁論後編』の中で突如登場した「昔語花咲男放屁論」は源内の最も深い部分が語られた物語であった。

自らを本草のカミに見立てた源内の思惑は本草学の新生だけではなく、世界全体の変革と創成であった。世界を新生させるほどの変革を行うということは、源内は本草学を使いながらありとあらゆる分野に切り込んでいかなければならないのである。ここに彼の多面性の本質を解き明かす鍵があると思われる。

火流布の製作を行ったのは、伝説上の品とされてきたものを石綿から織り上げることとその実在性を明らかにし、世界の常識の変革を担い、尚且つ日本国の貿易商品とする為である。焼物や毛織物を創成したのも土や動物といった本草学分野の探究と共に、従来の産業技術の向上方法を追求し独自の品の開発を行うことで本草学以外の分野の成長を担い、そして貿易品となつて世界中に流通した末には世界をわかつ程の変革と新生が起きることを願っていたからだと思われる。では本草学とは全く関係のなさそうな文筆業は何故行われたのだろうか。

彼は『物類品隲』や『火流布略説』といった学問書であっても登場人物を揃え、自身の感情や状況をふんだんに取り入れたものを書き上げる傾向がある。それは源内自身による源内の伝記としても成り立つといえるだろう。即ちフィクション性はないがストーリー性が高い。恐らく源内は堅苦しい事典のような学問書ではなく、有識人でない人間たちでも受け入れやすく親しみやすい「読み物」としての本草学書を目指していたと思われる。初めての物語である『風流志道軒伝』では異国に飛び立ち異国の人々と交流する勇気を描き、『放屁論後編』では自分の夢とエレキテルや羊の有益性について訴えるなど、源内は「物語」を媒介にして世界の創成を担う「本草学」を民衆に伝えようとしている。戯作や浄瑠璃などのフィクション性の高い作品を書いたのは、資金繰りと共に、民衆に伝わりやすい遊戯性の

本草学者平賀源内が創成したものは何か

高い文体に慣れる為ではないだろうか。また『火浣布説』や『日本創製寒熱昇降記』など自分が作り上げた物産の宣伝用リーフレットの作成にも源内は力を注ぐ。自分の「本草学」を他者に売り込む為の努力も怠らない。よって源内にとって「文筆業」とは、「世界を創成させる本草学」という自分の夢を民衆に広める為の広報活動であったと思われる。

おわりに

源内のこうした活動は結局実を結ばなかったように思われる。だが本当にそうだろうか。

もう一度、彼が主催した東都薬品会の様子を見てみる。この海や山を越えて出品者を募った薬品会はただ「本草学者」のみの会合であったのだろうか。『東都薬品会趣意書』から見るに世話人として名を挙げられている人間は植木屋である。また遠国在住の人間の為に指定された産物取次所は薬種商の宅である。植木屋や薬種商など一般民衆よりは物産に対する心得はあるだろうが名の知れた「本草学者」ではなく、また学者を生業としている人間でもない。即ち薬品会は学者間のネットワークに留まるものではなく、市井で実生活の一部として物産を使用する人々にまで及ぶものであった。ここに学術世界を市井から隔離せず実生活と結びつけようとする本草学のオープンな姿勢が見られる。

平賀源内が提案し、主催するにまで至った薬品会はまさにそれまでの「国家の益を模索」し、「宇宙の理を知るために物産を集め」、「貴賤の区別無くヒトの交流を図る」という江戸本草学の特殊性の全てが具現化され、一堂に会す

るものであった。

ここで源内は日本全土に渡る本草学ネットワークを構築することに成功する。

そしてこのネットワークは源内を中心とし、本草学の分野のみに留まることのない発展を遂げるのである。源内は本草学を根幹としありとあらゆる学問分野の変革の末に世界の新生を担いたい人間である。その為に医者、画家、作家といった人間達と多くの交流を重ねた。そして源内を媒介にして学問を超えた交流を知識人たちは担うようになっていったと思われる。

では本草学を中心としながら異分野同士を繋ぎ合せて増築を繰り返していったであろうネットワークはどのような成長を遂げるのだろうか。それは「サロン」の出現である。日ごと明らかになる「もの」だけではなく、未知なるものへの探求心が蓄積し、謎の解明を図る意欲と不思議に対する興味が集積し、その募り募った好奇心を使役して「もの」自体の本質に迫ることを楽しむ人間たちが一人の家に集まることで知をぶつけあう空間が現れたのである。その集まる「家」には全国津々浦々の珍しい物産が所狭しと置かれていた。「サロン」とは常時開催されているコンパクトな薬品会であったとも言えるだろう。

そんな小さな薬品会が日本のいたるところに出来ており、そして大家の家には毎日違う人間が全国からやってきたようである。本草学ネットワークは縦横無尽に日本に張り巡らされていた。そしてその連結は非常に強固であり、スムーズ且つスピーディーな伝達が行われていたと思われる。

源内の死から二〇年ほど経ったある日、大坂のサロンの中心にいた木村兼葭堂の元に江戸の幕臣大田南畝が尋ねてきた。源内とも親交のあった南畝だが、本草学者ではない。幕臣且つ江戸で名を馳せる戯作者であり狂歌師である。

本草学者平賀源内が創成したものは何か

文芸者達にとっても本草学は身近な存在であったのだろう。そして蒹葭堂への南畝の質問内容は、本草に関する知識のみならず、外交や貿易などの対外国政策にまで及んでいる。ただの市井の本草学者に送るような質問ではないと思われるが、蒹葭堂は適切な返事を南畝に送った。当時の本草学者はたとえアマチュアであっても日本を含んだ海外事情にまで興味を示し、精通していたことが分かる。

蒹葭堂と南畝の対話が行われた時代には既に実用商品学としての本草学は影を潜めていた。本草学は「もの」の知識に純粹にそしてディープに切り込み、人と人を結びつけるネットワークの要となっていた。しかし本草に特化された専門的な閉鎖空間を作り上げていたわけではない。本草学は南畝に代表されるような狂歌や文学は勿論、絵画や茶の湯という日本芸術、そして異国文化や日本との交易といった商業ルートに関わる知識まで包含したワールドワイドな視野と探究心を持った学者達を根幹として成り立っていた。そしてそのような学者らを中心として十八世紀から十九世紀に至るありとあらゆる日本の文化は結びつき、相互補完と刺激の伝導を繰り返していたのだろう。それは南畝と蒹葭堂の対話からも見て取れる。また幕臣である南畝が対外政策についてまで蒹葭堂に尋ねていることから為政者らもこのネットワークを利用していった可能性がある。

源内死後の本草学はまさしく源内の望んだ多角的視野と異分野を包含し統括する学問となり、その新生本草学を中心にした連続反応が日本では起こっていた。

そして日本の中心となる学問を究める本草学者の元には、江戸で名を馳せ、日本どころか中国の文献的知識に精通しているであろう南畝ほどの文化人が知恵を借りにやってくるのである。本草学者のそれも大家となれば連続の要となる人間であろう。すなわち複雑化されたネットワークの全貌を知り尽くしている存在に等しい。

これは今でいうWorld Wide Webと検索ツールに似ていないだろうか。World Wide Webを国語辞典で調べると「ネットワーク上の複数の独立した情報を変更することなく統合し、ハイパーテキストとして提供するシステム」といった定義が出てくる。まさしくネットワークを構築する複数の独立した分野（医学、語学、芸術など）を統括し、それらの知識を相互に関連付け、結び付ける仕組みを持った新生本草学の姿に合致する。また本草学者とは地球規模で相互接続されたネットワーク上に氾濫する情報を統括し、検索者（質問者）に合わせて答えを提供する検索システムのようなものとして一八世紀から一九世紀の日本では機能していたのではないだろうか。

そして生身の人間である本草学者である以上、検索者との相互作用が発生する。機械のように一方通行にはならない為、本草学者も検索者とのコミュニケーションの中で更に知識をつけ、見聞を深めていくのである。そして海外事情まで包含したネットワーク内部の情報は深遠性を増し、正確性を高め、膨張を繰り返していく。よって「成長する生体的World Wide Web」こそが江戸本草学の姿であり、江戸を中心とした文化が花開いた十八世紀後半以降の日本を国家として構築する為の基盤だったではないだろうか。木村兼葭堂のような市井に通じた本草学の大家の内側には世界に通じる「近世日本」の全てが詰まっていたと思われる。

この樹木図のような地球規模で相互接続されたネットワークを統括するWorld Wide Webのシステムを誕生させ、本草学者達に植えたのは源内である。薬品会によって本草学ネットワークを作り上げた源内は、他分野の変革と新生を促すために自ら異分野に切り込んだ。源内の試みは本草学を幹とし、他の分野に幹から吸い上げた栄養を与え、成長させ、樹木全体を育て上げることだ。その為に彼は日本国内で本草学を中心に医学、語学、絵画、陶芸、文学などの異分野を繋ぎ合わせただけではなく、外国と日本の差異と相同性に眼を向け、積極的にカピタンとの交流を図り

本草学者平賀源内が創成したものは何か

異文化の学術的知識や芸術技法を研究し習得した。つまり源内自身が「ネットワークを構築する複数の独立した分野を統括し、それらの知識を相互に関連付け、結び付ける仕組みを持った」World Wide Webそのものであったのである。

World Wide Webであった源内の目指した新生本草学とは、自分の活動即ちWorld Wide Webの具現化であったといえるだろう。そしてそれは決して源内の夢想で潰えてはいなかった。『本草綱目』や『本草綱目』のような画期的な本草学書は出なかったものの、木村兼葭堂のような本草学者達によって培われ、受け継がれていたのである。

World Wide Webとしての平賀源内は、地球規模で相互接続されたネットワーク即ち今で言うところのインターネット上に存在する情報を統合するシステムであった。彼の死後は彼の活動の意図を汲み取り、海外の事情にまで精通するWorld Wide Web本草学が出来上がり、それを究める本草学者達が現れた。そして他分野や異文化の情報を包含した本草学とその知識を引き出すことのできる本草学者達は近世日本国を構築する重要な土台となった。

即ち平賀源内の存在が無ければ十八世紀後半以降の日本国の発展と構築は無かったといえる。

平賀源内とはWorld Wide Webとして新たな価値体系を持った十八世紀日本国の基盤を作り、誕生させた人間であった。

彼は現代のインターネットツールにも匹敵しうる情報量を持った本草学ネットワークを生み出し、江戸後期へと至る日本と世界を繋ぐWorld Wide Webの創始者であったといえるだろう。

- (1) 東喜望 一九八〇年 「平賀源内の戯作 本草・物産との関連」『白梅学園短期大学紀要』第十六号。
- (2) 風来山人 中村幸彦校注 一九六一年 「風流志道軒伝」『風来山人集』岩波書店、一六九頁
- (3) 貝原益軒 『大和本草』(中村学園大学蔵) <http://www.lib.nakamura-u.ac.jp/kaibara/yana/index.htm> (二〇一〇年二月十三日閲覧) 三十五頁。
- (4) 同、六頁。
- (5) 同、四十四頁。
- (6) 城福勇 一九七六年 『平賀源内の研究』 創元社 三六〇頁。
- (7) 入田整三 一九三五年 『平賀源内全集』 下巻 荻原屋文館 一五〇一～一五〇五頁。
- (8) 同上。
- (9) 風来山人(中村幸彦校注) 一九六一年「放屁論後編」『風来山人集』岩波書店 二五二頁。
- (10) 同、二四四頁。
- (11) 同、二四五頁。
- (12) 同、二四六頁。
- (13) 同、二四九頁

参考文献

- 東喜望 一九八〇年 「平賀源内の戯作 本草・物産との関連」『白梅学園短期大学紀要』第十六号
- 小川顕道・宮川政運(神郡周校註) 一九八一年 『塵塚談 俗事百工起源』 現代新潮社
- 石田秀美 一九九四年 『博物之眼と臨床の眼』『物のイメージ・本草と博物学への招待』朝日新聞
- 入田整三 一九三五年 『平賀源内全集』 荻原屋文館
- 上野益三 一九八八年 『博物学者平賀源内(鳩溪)』『ユリイカ』第二十卷第四号 青土社
- 小沢弘・小林忠 二〇〇六年 『活気にあふれた江戸の町 「熙代勝覧」の世界』小学館
- 大石学 一九九五年 『吉宗と享保の改革』 東京堂出版
- 奥村正二 二〇〇三年 『平賀源内を歩く』 岩波書店

本草学者平賀源内が創成したものは何か

- 貝原益軒『大和本草』（中村学園大学蔵）<http://www.lib.nakamura-u.ac.jp/kaibara/yama/index.htm>（二〇一〇年二月二三日閲覧）
 笠谷和比古 一九九四年「新井白石と徳川吉宗」『物のイメージ・本草と博物学への招待』朝日新聞
 菊池勇夫 二〇〇三年『飢饉から読む近世社会』校倉書房
 城福勇 一九七六年『平賀源内の研究』創元社
 杉田玄白（片桐一男訳註）二〇〇〇年『蘭学事始』講談社
 高田衛 一九八八年「遊民のデイスクール」『ユリイカ』第二十卷第四号 青土社
 宋應星撰（藪内清訳註）一九七二年『天工開物』平凡社
 竹内誠 二〇〇五年『江戸の盛り場・考』浅草・両国の聖と俗』教育出版
 田中優子 一九八八年『江戸・情報センターの「工夫」者』『ユリイカ』第二十卷第四号 青土社
 田中優子 一九九二年『江戸の想像力』筑摩書房
 田中優子 二〇〇五年『江戸を歩く』集英社
 寺島良安（島田勇雄ほか訳注）一九八六年『和漢三才図会』平凡社
 土井康弘 二〇〇八年『本草学者平賀源内』講談社
 西山松之助 一九八七年『江戸文化誌』岩波書店
 風来山人（中村幸彦校注）一九六一年『風来山人集』岩波書店
 日野龍夫 二〇〇二年『平賀源内と『国益』』『江戸文学』第二四号 ペリかん社
 堀切直人 二〇〇五年『浅草 江戸明治篇』右文書院
 マエス、ユベール 山下真由美訳 一九八八年『風流志道軒伝』と江戸空想旅行譚』『ユリイカ』第二十卷第四号 青土社
 山田慶児 一九九四年「効分け・食分け・見分け——本草から博物学へ」『物のイメージ・本草と博物学への招待』朝日新聞
 李時珍（鈴木眞海訳、白井光太郎監修・校注）一九二九～一九三四年『重訂本草綱目』春陽堂書店

Hiraga Genai and his contribution to Japanese society and culture

KAWASAKI Eiko

Master's Course, Major in Sociology at Graduate School of Institute of
International Japan-Studies, Hosei University

Abstract

In this paper we examined Hiraga Genai and his contribution to Japanese society and culture. To this objective firstly identified Hiraga as the herbalist.

The herbalist was a kind of natural scientist originated China and they exceeded a tradition. In Japan, Yamatohonzo was written by Kaibara Ekiken. He made some highly critical remarks of “Hozoukoumoku”. At this point, we could say that Hiraga wanted to publish his scientific book like that of Kaibara, because Hiraga wanted to do the revolution and newborn of “World” including the nation.

Since the herbalism is a kind of natural history and the essence of this study contains a lot of fields, it was necessary for Hiraga to act widely. He made an important base of Japanese society and culture in the 18th century, although he could not achieve his plans. In other words, Hiraga created a kind of World Wide Web of 18th century which was able to compete for the internet tools in 21st century and combine Japan with World.